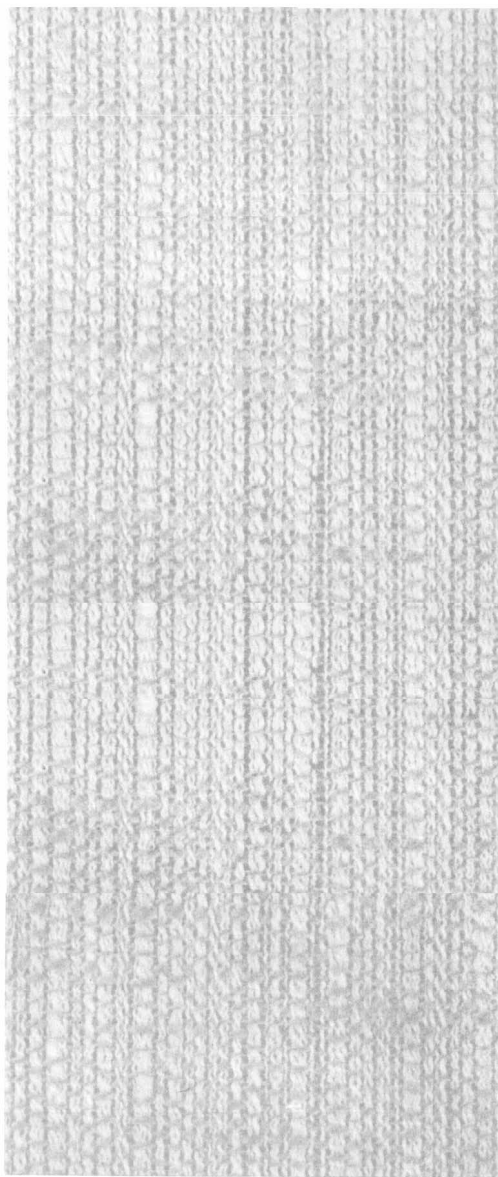


本百合子選集

第十二卷

新日本出版社



宮本百合子選集 第十二卷

1969年8月30日 初版 ©

定価 700円

著者 宮本百合子
発行者 松宮龍起

郵便番号 102 東京都千代田区富士見2の13の14

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京(262) 4732
振替番号 東京13681

落丁・乱丁本はお取替えいたします

〔鎌倉印刷納〕

目次

祖母のために.....	7
宝に食われる.....	16
わからないこと.....	19
狭い一側面.....	22
十年の思い出.....	25
昔の思い出.....	29
感情の動き.....	32
田端の坂.....	34
「処女作」より前の処女作.....	37

母.....40

電車の見えない電車通り.....50

阪.....58

行方不明の処女作.....61

わが父.....65

霞の影にそえて.....76

父の手帳.....78

写真に添えて.....86

生活の理想と実際.....90

女靴の跡.....91

くちなし.....94

明治のランプ……………	99
まちがい……………	102
二人の弟たちへのたより……………	104
青春……………	108
なつかしい仲間……………	117
旭川から——小熊秀雄氏の印象……………	123
父の手紙……………	125
繻珍のズボン……………	128
婦人作家は何故道德家か？　そして何故男の美が描けぬか？……………	133
人民のために捧げられた生涯……………	136
青田は果なし……………	138

女の学校	141
私の青春時代	145
一刻	148
私の愛読書	150
目をあいて見る	151
菊人形	153
生きている古典	163
手づくりながら	165
その人の四年間―婦人民主クラブの生立ちと櫛田ふきさん	167
日記	175
一九一四年	177

一九一六年	182
一九一七年	199
一九二一年	212
一九二二年	216
一九二三年	224
一九二五年	270
一九二六年	275
一九二七年	279
一九二八年	284
一九三〇年	358
一九三一年	426
一九三六年	429
一九三七年	433
一九三九年	438

一九四四年.....442

年譜.....455

「宮本百合子選集」収録作品一覽表.....483

注.....493

解説.....水野明善.....497

解題.....戸台俊一.....525

祖母のために

十二月の中旬、祖母が歿した。八十四歳の高齢であった。棺前祭のとき、神官が多勢来た。彼等の白羽二重の斎服が、さやさや鳴り拡がり、部屋一杯になった。主だった神官の一人がのりとを読んだ。中に、祖母が「その性高く雄々しく中條精一郎大人の御親としてよく教えよく導き」老いては月雪花を友として遊び楽しんだというような文句が頻りにあった。長寿を完了した人であつたし、困窮の裡に死んだ人でもなかったから、神官も他の文句を考えられなかったのだらう。けれども、私は、朗々と其等の文章が読み上げら

れたとき、明かに一種の不愉快を感じた。のりとうがあまりとおり一遍で、嘘だという気が切なく湧いた。正直に訊いたら、列坐の親戚達も皆そう感じたと言えたと思う。祖母は、そんな堂々たる、同時に白々しいのりなどにはまるで向かないたちの人であつた。一生じみに、小さく暮した人であつた。周囲に在る幸福や悦びを進んで心に味うようなことのなかった人であつた。それ故、私どもに、祖母は何処やら気の毒な、必要以上にいつも勤勉な人として感じられていた。若しとの形式がどうにでもなるもので、親しく話すような調子で「貴女の苦勞の多かった一生も先ず終りました。これからは安心して悠くりお休みなさい。本当に貴女はゆとりのない人であつた」と読まれたら、私は恐らく悲しさと一緒に身も心も溶けるような寛ろぎを感じて彼女のために泣いただらう。祖母の名は、運といった。

祖母は、九月の下旬から、福島県下の小さな村*^{*}に行っていた。祖父が晩年を過したところで、特徴のない僻村だが、家族的に思ひ出の深い家があつた。七八年前まで、彼女は独りで女中を相手にずっとそこで

暮していた。東京の隠居所へ移ってから、祖母は春や秋になると田舎を懐しがった。あっちには、彼女が苗木の時から面倒を見ていた桐畑、茶畑があった。話相手の年寄達もいるし、彼女達を聴手とすれば、祖母は最新知識の輸入者となれた。行きたくなると、彼女は、息子や孫のいるところで、思いあまったようにつぶやいた。

「おれやあはあ、安積^{あさか}へでも行こうと思うごんだ」

（祖母は米沢生れで、死ぬまで東京言葉が自由に使えなかった。）

あまり思い入った調子なので、皆は不安になって祖母を見た。

「どうして？ おばあさま」

祖母は、赤漆で秋の熟柿を描いた角火鉢の傍に坐り、煙管などわざとこごみかかって弄りながらいう。

「近頃はあ眼も見えなくなつて、糸を通すに縫うほどもかかるとごんだ。ちつとは役に立ちたいと思つて来たが、おれもはあ、こうなつてはしょうがない。——今年はおぶない。安積で死ねば改葬だ何だと無駄な費をかけないですむから、おれやあ……」

「いやなお祖母様！」

私が無遠慮に、祖母の言葉を遮るのが常であつた。

「そんなことをおっしゃると、みんな心持がわるくなつてよ。ただおれやあ安積へ行きたくなつたごんだとおっしゃいよ。——そうでしょう？ 私も行つても悪くないごんだから、ついて行つて上げるわ。それでいいでしょう？」

祖母は、いいともわるいともいわず、暫く黙り、またいう。

「百姓どもははあ、一寸でもよけい畑作ろうと思つてからに、桐の根まで掘り返すごんだうわ、それでいて芽を一本かいてくれない。それも心配だし、御不動様へつづも上げなきあなるめえし」

憐れな祖母は、これぞという用事もなしに、田舎へ往復してはいけないと感じていらしかった。彼女の癖のみこめないうち、よくこの陰気っぽい話の切り出しがたで、皆が滅入つた。父や母は特に感情上複雑な理由でも潜んでいるのではないかと案じたらしい。しかし、祖母は、そういう朗かでない生れつきであつたのだ。損な人であつた。多くの場合、逆に感情を表

した。私を愛してくれていたのに、顔を見ると、「前は子供のうちはめんごかったのになあ」といった。また、すきな物を召上れといわれ、実に嬉しいに違いないのに、「おらあ子持の時分から、腹の減るということを知らなかった女だごんだ」というように。後では、時節がよくなると、皆の方から、田舎に行つて世話をやいて来て下さいといった。去年も五月に、私が頼んで一緒に行つて貰った。夏は東京に帰つて過し、秋私と入れ違いに再び田舎に行つたのであった。

十一月二十日すぎに、英国から従弟の一人が帰朝した。祖母とは特別深い繋りがあった人なので、寒くもなるしそれをよい知らせに迎いが立った。従弟の歓迎の意味で近親の者が集つて晚餐を食べた時、私は帰つてから始めての祖母に会つた。子供のうちに、赤いやつやした両頬で、楽しそうにはしていたが、二三个月前に比べると、ぐっと老聾したように見えた。弱々しいあどけなさめいたものが、体の運び方に現れた。私は、思わず、

「おばあちゃん、いかがでした、安積は」といった。御祖母様という言葉に暗示される威厳、構

えというようなものが自然とれていたものと見える。そのとき祖母は、賑やかに揃っている連中を見渡しなから、巾着を何処へやったか判らなくなつて困る困るところぼした。

数日後の或る朝のことであつた。電話がかかつて来た。私は友達の家に行った。電話口に出て見ると、母の声で、祖母が四五日前から腸をこわし、昨夕から看護婦をつけている。見舞いに来るように、ということだった。——電話を切りながら、安心のような不安心なような不確な心持になった。母自身もどの程度まで大事に考へてよいのか見当のつかない口ぶりであつた。私は、途中で平常祖母の好きな謡曲のレコードを買つて行つた。

祖母は、几帳面なたちであつたから、隠居所はいつもきちんと片づき、八畳の部屋も広々としていた。祖母は、そこに寝ているのだが、派手な夜具の色彩や看護婦や枕元の小机などで、部屋は狭く活気満ちて見える。私は美しいオレンジ色の毛布から出ている祖母の顔附を見ると、例え四五日でも知らずにいたのをすまなく感じた。祖母は想像して来たより遙かに衰えてい

た。入れ歯をとっているせいもあったろう。口元など、別人のように痛々しく皺みくぼんでいる。息が抜けるので一層弱い声で、祖母は、

「なしてこげえな病氣になったろう。……早く死にたいごんだなあ」

と訴えた。彼女は、病氣より何より自分で厠に行けないのを苦にやんだ。一寸気を許すと、夜なかでも独りで立つて行こうとするので困ると、看護婦が説明した。私は無頓着な元氣な風で、祖母の一国さを笑った。そして、乱れた白髪を撫でつけてあげながら少し大きな声で、

「おばあちゃま、謡の種板を買って来たのだけれど、おききになりますか」

と訊いた。祖母は、暫く考えていたが、穏やかな口調で、

「謡はいいなあ、おら地言じごん（文句）は判らないでも、音をきくだけで、氣までしゃんとするごんだ」

と答えた。私は重ねて、

「おききになる？」

と尋ね、合点するのを見て悦びを感じた。友達は、数

年前に母を失った経験を持っていた。彼女は、恢復力のない病人は、音楽などをいやがるようだと話した。祖母が、蓄音器を聴こうというのは、よい徴候だ、大丈夫だと、私は嬉しく思ったのであった。

翌日、祖母は鉢の木や隅田川など、満足した顔附で聴いた。傍で、把手てしを廻しながら彼女の楽しむ様子を眺め、私はレコードを買って来てよいことをしたと思った。昔から祖母は謡曲好きなのに、近頃若い者達の買いためるレコードは、皆西洋音楽のものであった。それらもすきでききはしたが、時々思いついたように、謡のは無いかといひ出した。田舎に出かける数日前の夜も祖母は私にそれをいい出した。私は、彼方此方捜して見た。長唄はあるが、謡は無い。祖母はもう聴かれるものと思ひ、わざわざ椅子の上に坐って待ちかまえている。私は、素氣なくありませんといえなくなった。仕方なく、度胸を据えて、長唄の石橋をかけた。祖母は、それとは知らず、掛声諸共鼓が鳴り出すときつちり両手を膝につっかい、丸まった背を引きのぼすようにして氣張った。その姿は、滑稽でもあり、また氣の毒至極であった。實際聴きわかる耳もないの

に謡と思うとああいふ風に氣を張るのかと思うと、暗い一念、という印象が強く私に遺されていた。先ず本ものの謡がきかされてよかった。

腸の方は、少しづつよい方に向い、祖母は甘酒を頻りに嚥った。食慾は余りつかない。そのうちに父が九州まで出張しなければならなくなった。用事は彼を待っているが氣が進まず、やっと、医師の保証で出立した。出立の夕方父は、隠居所に行った。

「一寸用で国府津まで行くと申上げて来たからその積りでいてくれ。遠くだと落胆なさるといけないから」「そうお、私困ったわ、父様が九州へいらっしゃるといってしまつてよ、もう」

「変だね、始めて聞くようにいつていらしたよ」「じゃあお忘れになったのよ、却つてよかったわ」

父の旅行先には、毎日夕刻「ハハカワリナシ」と電報を打った。祖母は、父の多忙のため、幾日も顔を見ないことに馴れていた。旅行については何もきかず、蜜柑の汁、すっぽんのスープ、牛乳、鶏卵などを僅かに飲みながら、朝になり夜になる日の光を障子越しに眺めている。口を利くのは、まだ起きてはいけないか

という質問と、何故こんな病氣になったろうという述懐の時だけである。私の友達が綺麗なカアネーションを持って見舞いに来てくれた時、祖母は始めて、病氣を訴える以外に口を利いた。

「美しい花だことない、こんな花は日本で咲きますか」

繰返し繰返し名を訊き、飽かず眺めた。祖母は一体に風流心のない人であった。部屋でも塵なく片づいてさえおれば堪能しているのに、この時三輪の花に示した優しさは、前例ないことであった。祖母は御愛想でなくその華々しい薄桃色の草花を愛した。後で、種々枕元に飾ったがどれもそのカアネーション程は氣に入らなかった。そして、不満そうに、

「あのお友達の下すった花はよかったなあ」と呟いた。

四五日退屈な日が過ぎた。医者は段々祖母の食慾不振を不安がり始めた。生活力が洩れる水のように、絶えず目立たず然し恐ろしい粘り強さで減退し始めた。一昨年の大震災当時祖母は過度な苦勞をした。実の娘と孫とを失った。以来、衰えが目についた。病氣その

ものは、もう癒ったのに、恢復する力が足りないのだ。祖母自身、生きたがらない。うっとりと死にたがっている。そういう病人を見ているのは不思議であった。激しい病と戦う若者を看護するような意気込みがない。なんでも活かそうという熱が湧かない。「どうだろう」——漠然とした恐怖のない心配があるだけだ。

或る日、私は看護婦の入浴の間、祖母の傍にいた。火鉢の火が少なくなって来た。台所に行つてガス火起しを見つけているうちに、私はふと何とも云えず胸を打つたものを見出した。硝子戸棚の下の台に、小さく、カンカンに反くりかえつたパンが一切、ぼつねんと金網に載せたまま置いてある。眼を離そうとしても離れず、涙であたりがぼうつとなった。祖母の仕業だ。祖母は朝はパンと牛乳だけしか食べない。発病した朝焼いたまま、のこしたのだろう。捨てることを誰も気がつかなかったのだ。涙ぐみながら、私は自分の涙を怪しんだ。奇妙ではないか、祖母は決してこのパンばかりしか食べるものがなかったのではない。美味しいものがいくらか食べられた人だ。それなのに、この古パン

の一切れを見ると云いようなく哀れで、彼女の全生涯が、忘れられてカンカラに乾からびたこの一切のパンの裡に籠っているように感じるのは、どうしたことだろう。台所はからりとして明るく、西日がパンの載っている金網の端に閃いていた。

私の祖母に対する感情は変わった。考えて見ると、私と祖母とは、仲のよいような悪いような複雑な間であつた。祖母は概して無智で、押しが強く、ごくの実家であつた。昔の女らしく、一種の陰険さもあり、見識がないから下らない気兼苦勞をする人であつた。私は、彼女の総てに朗々としなのが大嫌いであつた。妙なことに拘わつて、忍耐強い性格のまま執念深くやられると、私は憎しみさえ感じた。そして、怒つた。怒りながら、私は祖母のために、編ものをした。細かい身の廻りのことにおのずから気がついた。

「いやなお祖母様。この装でお出かけになるつもり？駄目！ 駄目！」

祖母は、ちゃんとした服装を一人でととのえることを知らないらしかった。手荒いように、然し念を入れて、私が襟元などをよくなおした。祖母と私とは、そ

ういう心持のいきさつなのであった。変に哀れっぽい乾からびたパンを見てから、私の裡に在る真実が自分でも判らない一杯さで心に溢れて来た。いやなおばあちゃんという点は依然としてあるが、厭でもよいというような気持、ただ可哀想という心持。――

父は急いで九州から戻った。帰った日から祖母の容態が進み、カムフル注射をするようになった。十中八九絶望となった。祖母は、心持も平らかで、苦痛もない。私は、父の心を推察すると同情に堪えなかった。

父は情に脆い質であった。彼にとって、母は只一人生き遺っていた親、幼年時代からの生活の記念であった。兄や弟、妹たちは皆若死をした。母がなくなれば、妻子を除いて、父は独りぼっちだ。父も若くない。寂しく思うだろう。私は自分が子としての立場にある故か、父を愛し愛している故か、それがひどく父の身に代って思い遣られた。

十六日の晩、私は息抜きという心持で外出し、外で夕飯をたべた。帰って夜中祖母の傍についていた。翌朝五時頃眠って午後起き、また病室に行った。看護婦の数が殖え、医師のいる時間が延び、家中の生活に昼

夜の境がぼやけ始めた。その恭々しい混雑の裡で、動かず、静かにしているのは、祖母だけだ。けれども、凝つと脈搏に注意したり息の音にきき入っていると、祖母はこれまでの祖母とはまるで違い、ひっそりした内密の魂の何処かで、いそがず、綿密に、何かの準備をしている人のように思えた。手落ちない、この世の最後の仕度にとりかかっているような。傍の私などに窺い知れない内部的なものが生じたようであつた。

臨終は、ごく穏やかであつた。細る呼吸に連れて生命が煙のように立ち去った。体は安らかで知覚なく、僅かに遺つた燼のように仄温いうちに、魂が無碍に遠く高く立ち去って行く。決して生と死との争闘ではなかった。十分生きた魂の自然な離脱、休安という感に打たれた。八十四歳にもなると、人はあのように安らかに世を去るものだろうか。

私は、これまで弟妹や外祖母、叔父などの死に会っていた。その経験から、この祖母の死も冷静に受けられると思つていた。年に不足はないのだし、苦痛ない往生を遂げたのだから。けれども、この予想は誤つて

いた。祖母の臨終の時から、一種異様な寥しさが私の心の底に食い入った。死なれて見て、祖母と自分との絆が如何に深いものであったかを知った淋しさとも云える。何だか淋しい。心持の上で、祖母は死んでこの世から消滅しきったものとは思えず、芝居をする遠見の敦盛のように、遙か彼方で小さく、まざまざと活き動いているのが見えるようだ。祖母の姿や声もはつきりしている。ふと、

「おばあちゃん」

と呼びかけたような気持になる。然し、祖母は、もういない人だ。二度と会えない。どんなに思っても私の生涯に再び会える時は無くなったのだ。こんなに鮮やかに、こんなに微細な髪のかせまで判っている彼女の全存在が、只私の心にだけ止っている影像に過ぎないとは、何という不思議だろう！

物静かなこの淋しさは、私に種々のことを思わせた。特に、将来自分がいつかは経験しなければならぬ愛する人々との別離に対してどんな用意があるだろうか、ということが考えられた。祖母との訣別は思いのほか強く私を打った。祖母でさえそうだ。まして、

自覚し思い込んで愛している幾人かの愛する者との別れが、不意に來たら、自分はどうするだろう。この恐怖は、祖母の葬送前後著しく私を悩ました。それを考えると、自分の健康なのが却って重荷のようで、涙が出た。私が先に死ぬのであったら、一番よい。愛する者を次々に送って最後に自分の番になる寂寥を思うと殆ど堪え難くなった。

日数が経つと、そんな感情の病的に弱々しい部分は消えた。私は再び自分の健康も生も遠慮なく味い出した。私はやはり日向で、一寸したことに喜んで、高い声をあげてはあはあと笑う。

祖母は、水に棲む貝で例えれば蜆のような人であった。若し蜆が真珠を抱くものとすれば、それは私に対して持ってくれた一粒の愛だ。

通夜は賑やかであった。私は眠れず、二晩起き通した。人々は、種々雑談した。自分も仲間になって話しながら、そこに祭られている当の祖母について誰一人何の思い出らしいものをも話さないのを佯しく感じた。祖母は全然逸話を持たない人であった。私の心に甦って来る事々も、皆、祖母自身から聞かされた、第